2023年12月17日
待降節第3主日
菊地 功 大司 教　メッセージ

待降節の後半は、主の降誕を待ち望む 準 備の時期に当てられます。主の降誕の出来事を黙想するとき、どうしてもわたしたちは、10月頃からはじまった聖地での暴 力 的な混乱を思わずにはいられません。

今年の10月頃から始まったイスラエルによるガザ攻撃は、「聖地」の現実を 象 徴 しており、それは偶発的出来事ではなく、長い歴史を背負った人類の悲劇の一つであり、いくたびも繰り返されてきた悲劇でもあります。

神の言葉が人となられ、人間のいのちの尊厳を神があらためて示されたその地において、いのちを暴 力 的に奪い合う紛争は、どのような理由があっても正当化することはできません。あらためて、いのちを守ることを優先するように呼びかけたいと思います。

聖地の混乱の原因に関して、忘れられない体験があります。カリタスジャパンの視察でエルサレムを初めて 訪 れた2000年7月末のことでした。イスラエルが管理する西エルサレムで、パレスチナ人の知人が、「是非とも見せたいものがある」と、ある一軒の家に連れて行ってくれました。その家の 住 人に声をかけるでもなく庭まで入り込み、一本の木を指さし、「この木は、わたしの父親が生まれた記念に、祖父母が植えた木だ。ここは 私 たちの家だったんだ。1947年以前に戻らない限り、何も解決しない」とつぶやかれました。

1947年11月29日、国連総会はパレスチナの分割を決議し、そして1948年のイスラエル建国、さらにはそれに引き続いた第一次 中 東戦争。その混乱の中で、当時70万人に及ぶパレスチナ人が住む家を 失 い難民となったと記録されています。現在のパレスチナ難民の始まりでした。知人の父親もその一人でありました。

イエス・キリストの誕 生 という、いのちの 尊 さに思いをはせるこの時期、「聖地」を支配

するのがいのちを奪う暴力であることほど、悲劇的なことはありません。

神のひとり子であるイエスは、常にわたしたちと共におられる神、インマヌエルであります。その共におられるイエスは、神の「ことば」そのものであります。人となられた神のことばは、闇の中を歩む民を照らす希望の光です。生きる希望を生み出す存在です。その光は、神のいつくしみそのものでもあります。

福音は、洗礼者ヨハネが、その光の先駆者として、光をあかしするために使わされたと記します。「主の道をまっすぐにせよ」と荒れ野で叫ぶ声であると記します。今こそ、洗礼者ヨハネの存在が必要です。暗闇にあって輝くいのちの光をあかしし、進むべき道を指し示す声となる先駆者ヨハネが必要です。ヨハネは、わたしたちではないでしょうか。